

ちようと怒濤

小川未明

青空文庫

美しいちようがありました。

だれがいうとなく、この野原のほらの中から、あまり遠方えんぽうへゆかないがいい。ゆくと花はながな
い、ということをしきましたから、ちようは、その野原のほらの中なかを飛びまわっていました。
しかし、その野原のほらは広ひろうございましたので、毎日まいにち遊ぶあそぶのに、不自由ふじゆうを感じかんしませんし
た。自分じぶんばかりでない、たくさんのほかにのほかのこちようもいました。また、みつばちもいまし
たから、さびしいことはなかつたのです。

野原のほらには圃はたけがありました。菜なの花はなが咲さいています。また、麦むぎがしげっています。そのほ
か、えんどうの花はなや、いろいろの花はなが咲さいています。その花はなの上うへや、青葉あおばの上うへを飛びま
わっているだけでも、一日いちにちかかるのでありました。

ある日ひのこと、みつばちは、そのちように向むかっていいました。

「わたしは、菜なの花はなや、えんどうの花はなの上うへを飛びまわっているだけなら、まちがいはあり
ません。それはこの圃はたけの中なかにさえいれば、夏なつになると、なすや、うりの花はなが咲さきますから、
とうぶん花はなの絶たえるようなこともありません。その時分じぶんにはせみも鳴なくし、いろいろの虫むし
も鳴なきます。まあ遠とおくへいくなどという考かんがえを起おこさずに、おちついていることですね。」

と、みつばちはいったのです。

ちようは、このときに、格別、ほかへ行ってみたいなどという考えをもちませんでしたから、みつばちのいうことを笑ってきいていました。

そして、風に吹かれて、ちようは、美しい羽をひらひらさせて、菜の花の圃を飛んできました。このちようの美しいのは、ひとり、みつばちの目にそう見えたばかりでなく、同じちようの仲間でも評判になつていました。それほど、このちようの羽は大きく、赤黄・黒・青、いろいろの色で彩られていました。

ちようは、圃の上で、多くの仲間に出あいましたが、自分の羽ほどきれいなを持つている仲間を見たことがありませんでした。また、そんなに大きな羽を持つているのも見ませんでした。

「あなたは、ほんとうに美しくお生まれついてしあわせですね。」と、ある仲間は、心からうらやましく感じて、そういいました。

あるとき、一つの羽の青い、小さなちようは、彼に向かつて、

「あなたは、けつして、この野原からほかへ行ってはいけませんよ。この野原の中の女王ですもの。」といいました。

「なぜ、そんなにほかへいつてはいけないのですか。」と、ちようは問いました。

すると、羽の青いちようは、

「私は、やはり、この野原にばかりいるのがつまらなくて、あちらへいつたのですよ。それはあんまり遠いところではなかったのです。あの青木の見える街道を一つ越えたばかりです。するとふいに、大きな袋のようなもので私はすくわれました。私はびっくりしました。人間が、私を捕らえたのです。みると、その人間は、ほかにも、私よりはきれいなちようを幾つも手に持つていました。ちようど、それはあなたのように美しいちようばかりでした。しかし、あなたほど美しいとは思いませんでした。私はどうなることかと身震いをしていますと、『なんだ、こんなつまらないちようか。』といつて、その人間は私をふたたび自由にしてくれました。私は、自分の体が、あなたのように美しくなかったのを、ほんとうに、そのとき、幸福に感じました。私は、そこから、すぐにもとの道をもどつて、この野原に帰つてきましたのです。』と美しくちように向かつて語りました。ちようは、その話をきいて、いろいろの空想にふけたのです。

「人間が、そんなにちようを捕らえて、なににするのでしよう。」と、青いちようにたずねました。

「どうせ、殺されるのだと思います。そして、なにになるものか私にはわかりませんが、人間は残酷なものだと思いますから、格別、用はなくても殺すのでしよう。」と、青いちは答えました。

また、美しいちはたずねました。

「いつたい、あちらに、なにがあるのでしょうか。」といって、青いちよの顔を見守つたのです。

青い、小さなちよは、菜の葉の上に羽を休めながら、

「私もよく、知りませんが、なんでも話にきくと、人間の住んでいるりっぱな町があるそうです。その町には、この野原に咲いているよりも、もつと美しい花が、たくさんあるそうです。まだほかにいろいろ珍しいものや、私たちには用事のない、名の知らないようなものがあったところにあるということです。」といいました。

「そんな美しい花を人間はどこから持つてきたのでしょうか。また、なににするのでしょうか。」

「人間は、どんな遠いところからでも、船や車に乗せて持つてくることができます。人間は、やはり美しいものはなんでも好きなようです。ずっと南の方からも、また、北の

方ほうからも、いろいろ珍めずらしい草くさや、花はなを集あつめてくるのです。」

青あおい、小ちいさなちようは、自じぶん分の知しつているかぎりをみんな話はなしてしまおうと、

「またお目めにかかります。」といつて、どこへともなく飛とび去さつてしまいました。

その後あとで、美うつくしいちようは、独ひとり物もの思おもいに沈しずみました。ちようは、人にんげん間の造つくつた町まちにいつてみたくなつたのです。「人にんげん間は、美うつくしいものはなんでも好すきだというから、きつと、自じぶん分ぶんも好すきにちがいない。好すきなものは、たとえ捕とらえても、命いのちを取とるようなことはいらないだらう。そして、かえつて、愛あいしてくれるにちがいない。」と、ちようは思おもつたのであります。

ちようは、いつまでも、この野原のほらの中なかを、あちらこちらと飛とんでいることに飽あきてしまいました。そして、ぜひ一度ど、だれでもいつてみたいと思おもう町まちにいつて、いろいろな珍めずらしい花はなを見みてこようと思おもいました。

ある日ひ、ちようは、いつか、みつばちのいつたことをも忘わすれて、野原のほらを離はなれて、あちらの空そらへ独ひとりで飛とんでゆきました。これは、いい天てん氣きの日ひで、空そらの色いろは、四ほう方ほう一たい帯たいに晴はれました。しばらく旅たびをしたと思おもうと、ちようは、はるか目めの下したに黒くろい屋根やねの固かたまつた町まちを見みたのであります。

「美しい花のあるというのは、この町か。」と、ちようは思いました。

しかし、ちようはどこへ降りたらいちばん安全だろうと、しばらく空中に迷っていました。そのとき、なんともいわれない、やさしい音色がきこえてきたのであります。ちようは、かつて、こんないい音をきいたことがありませんでした。これはきつと、人間の中での、やさしい人間の住んでいるところだろうと、なんの考えもなく、そう思わずにはいられませんでした。

ちようは、そのやさしい音色のする方へと、音をたどって降りてゆきました。そこは、ある大きな家の裏のところであつて、いい音色は、へやの中からもれているのです。ちようは、なにに止まつたらいいかと、しばらく、この庭を見まわしました。その庭は広かつたとはいえ、もつともつと広い野原から飛んできたちようには、広いとは感じられなかつたのです。

ちようは、幾つかの鉢に、いろいろの花の咲いているのを見ました。これは、どれも、いままで見たことのないような、美しい花ばかりであります。ちようは、いつか羽の青いちようの物語ったことなどを思い出しました。なかにも、ちようは、黒い鉢に植わつた、真紅なばらの花を見たときには、ほんとうに、びっくりしてしまいました。それで、

たちまち、なんともいえない香気かおりに恍惚うつとりとなつてしまつて、ちようは、あとさきの考かんがえもなく、その真紅まっかな花弁かべんに吸すいつけられたように、その上うえに降おりて止とまつたのです。

こんなうつくに美しい花はなが、この世よの中なかにあるだろうかと、ちようは思おもいました。これこそ、私わたしが憧あこがれていた花はなだと、ちようは思おもいました。

「まあ、なんというきれいなちようさんでしょう。わたしは、まだこんなに美うつくしいちようは見たみことがなかつた。さあ、わたしのみつを思おもうぞんぶんに吸すってください。」と、真紅しんくのばらはいいました。

遠とおく、町まちに憧あこがれて飛とんできたちようは、この花はなに接吻せつぶんしました。それは、ほんのつかのまであつたのです。

「あすこに、子供こどもがあなたをじつと見みていますよ。きつと、ここにやつてきて、あなたを捕とらえますよ。そして、針はりであなたの体からだを刺さしてしまいますよ。はやく、お逃にげなさい。そして、また、忘わすれずにきてください。わたしは待まっています。」と、ばらの花はなはいいました。

このとき、おほおほきな袋ふくろのようなものが空そらを横よこぎりました。もし、もうすこし早はやくちようが、その花はなの上うえを飛はなび去さらなかつたら、きつと、捕とらえられてしまつたのです。しかし、ちよ

うは、ただ、はげしい風かぜのあおりを身みに感かんじただけで、無事ふじでありました。

ちようは、その夜よ、近くちかの草原くさはらに休やすみました。そして、また、明あくる日ひ、この庭にわにいつてみたのです。けれど、哀あわれなちようは、ばらの花はなに近ちか寄かることができませんでした。

人間にんげんが、その庭にわにいたからです。

三日みつかめの晩方ばんがた、ちようは、今日きょうこそは、花はなに近ちか寄かつて、いろいろの思おもいを語かたろうと思おもつたのであります。

天気てんきの変わる前まへ兆ちようか、西にしの夕焼ゆうやけけは、気味きみの悪わるいほど、猛たけり狂くるう炎ほのおのように渦卷うずまいて紅あかくなりました。

ちようが、大きな羽はねをはばたいて、庭にわさきに降おりようとした刹那せつな、真紅まっかなばらの花はなは、もう寿じゆみよう命めいがつかたとみえて、音おともなく、ほろりほろりと、金色きんいろを帯おびた夕日ゆうひの光ひかりの中なかに砕くだけて散ちるところでありました。

これを見みたちようは、どんなにうらめしく思おもつたでしょう。そして、またこの花はなと語かたるのはいつであらうとなげきました。ちようは気きも狂くるいそうでありました。無念むねんと残念ざんねんとで、もう生いきている心地こころちはなかつたのです。自分じぶんの体からだは、どうなってもいいというように、ちようは、絶望ぜつぼうのあまり、深ふかい考かんがえはなしに、空そら高く、高たかく、どこまでも高たかく舞まい上あ

がりました。ちようは、下界げかいの有あり様さまを、もはやなにも見みたいと思おもいませんでした。すると、空そらには、怖おそろしい、烈はげしい風かぜが吹ふいていました。ちようの体からだは、急きゆう流りゆうにさらわれた木この葉はのように、あつと、思おもうまもなく、遠とおく、遠とおく、吹ふき飛とばされてしまいました。

どんな強つよい風かぜに飛とばされた木この葉はも、一度どは落おちるように、ちようは冷つめたい土つちの上うえに落おとされました。そして、気きがついたときに、すさまじい音おとが、真まつ暗くらな中なかから、起おこつてきこえていたのです。そこは、海うみ辺べでありました。

ちようは、湿しめった砂すなの上うえにしがみついて、ふるえていました。夜よが明あけると、自じ分ぶんの美つくしかつた羽はねは破やぶれていて、そして、前まえには青あおい青あおい海うみが、うねり、うねっているのが見みられたのです。日ひの光ひかりを浴あびて、ちようは、いくらか元げん氣きがでてきました。そして、どこかの辺あたりに、花はなが咲さいてはいないかと、ひらひらと舞まい上あがったのでした。けれど、風かぜが強つよくて、ややもすると傷きずついた羽はねが、そのうえにも破やぶれてしまいそうでした。やつと、砂すなの丘おかに黄きいろ色いろな花はなの咲さいているのを見みつけて、その花はなの上うえにとまりました。

黄きいろ色いろな花はなは、ちようど星ほしのように咲さいていました。そして、風かぜに吹ふかれて、頭あたまを地ちにつけていました。あまりみつばちもいなければ、また、ほかのちようの姿すがたも見みえませんでした。

た。花は黙っています。海の上では鳥が鳴いていました。なんとなく、悲壮な景色であつたのです。

ちようは、じつとして、終日、その花の上に止まっていました。もとの野原へ帰ろうと思つても、いまは方角すらわからないばかりか、遠くて、傷ついた身には、それすらできないことでありました。

たちまち、海の上が真紅に燃えました。夕日が沈むのです。この光景を見ると、ちようは、ふたたびばらの姿を思い出しました。もう永久に、あの姿が見られないと思うと、ちようは、また物狂おしく、昨日のように、空高く舞い上がったのです。美しい花弁のように傷ついたちようの姿は、夕日に輝きました。強い風は、無残にちようを海の上に吹きつけました。そして、たちまち怒濤は、ちようをのんでしまつたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「中学生」

1922（大正11）年6月

※表題は底本では、「ちようと怒濤《どとう》」となっています。

※初出時の表題は「蝶と怒濤」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ちようと怒濤

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>